

平成 22 年 4 月 12 日現在

研究種目： 基盤研究 (B)
 研究期間： 2006～2009
 課題番号： 18320115
 研究課題名 (和文) テル・タバンの楔形文字アッカド語文書の研究
 研究課題名 (英文) Study of the Cuneiform Texts from Tell Taban
 研究代表者
 山田 重郎 (YAMADA SHIGEO)
 筑波大学・大学院人文社会科学部研究科・教授
 研究者番号： 30323223

研究成果の概要 (和文) : シリア東北部、ハブル川中流域に位置するテル・タバンの遺跡において 2005 年 2 月から再開された国士舘大学発掘隊の調査によって大量の楔形文字アッカド語文字資料が発掘された。本研究は、前 2 千年紀に由来するこれらの文書を解読、研究することで、古代都市タバトゥム/タベトゥ (=現テル・タバンの) とその周辺の歴史的・文化的諸相を解明した。それによって、同都市は、ユーフラテス中流域やティグリス中流域の有力国家 (テルカ、アッシュル) の政治的・文化的影響下におかれながら、複雑な歴史の変遷を遂げたことが示された。

研究成果の概要 (英文) : A large number of cuneiform Akkadian texts have been discovered by the excavations of Kokushikan University at Tell Taban, in the north-eastern Syria, along the middle Habur river. In this research project, we deciphered those texts and studied those contents to clarify the historical-cultural aspects of the ancient city of Tabatum/Tabetu (=modern Tell Taban). It was revealed that the city experienced various historical changes under the influence of powerful neighboring kingdoms of the middle Euphrates (Terqa) or the middle Tigris (Assur).

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	3,400,000	0	3,400,000
2007 年度	1,900,000	570,000	2,470,000
2008 年度	1,900,000	570,000	2,470,000
2009 年度	2,100,000	630,000	2,730,000
年度			
総計	9,300,000	1,770,000	11,070,000

研究分野：アッシリア学 (楔形文字文書学)

科研費の分科・細目：史学・東洋史

キーワード：西アジア史、アッカド語、楔形文字、アッシリア学

1. 研究開始当初の背景

2005 年 2 月ならびに同年 8 月～10 月にシリア東北部、ハッサケ州、ハブル川中流域に位

置するテル・タバンの遺跡において国士舘大学発掘隊 (代表：沼本宏俊 [国士舘大学体育学部教授]) によって行われた発掘調査により、

前 2 千年紀後半に由来する 150~200 点程度と推定される楔形文字アッカド語粘土板文書が発見された。初期的検分を行った結果、これらの文書群は紀元前 13 世紀後半から 12 世紀初頭にかけて書かれた行政文書（受領書、契約文書等）ならびに書簡であり、古代名をタバトゥ/タベトゥと呼ばれたテル・タバンを首都とする王国を領有し「マリの地の王」を名乗った支配者たちの宮廷組織に所属する文書庫であることが確認された。これらの粘土板を中心とし、テル・タバンの場合には日本隊によって種々の楔形文字文書史料が発見され国内外において高い注目を集めており、これらを速やかに解読し、体系的な研究を開始することが求められた。

2005 年の粘土板文書の見出し、1997 年から 1999 年にかけて国士舘大学古代イラク研究所がテル・タバンの行った発掘調査は、主として中期アッシリア時代（前 13-11 世紀）の層位から楔形文字資料（71 点）を発見していた。これらは、主として建築の際に建築物の基礎や内部に埋められる記念埋蔵物である円筒碑文や刻文付き焼成レンガの大小の断片であり、建築者としての王名とその系図および建築内容についてのデータを提供する。これら文字資料はシュテファン・マウル（ハイデルベルク大学教授）により研究され、前 13 世紀末から前 11 世紀初頭にかけてテル・タバンを首都とする中規模の王国を統治し「マリの地の王」を名乗った王達の名と王統が明らかにされていた。本研究が研究対象とする 2005 年出土文書は、こうした先行研究が明らかにした政治史的枠組みに照らして行われることでより質の高い研究成果が約束されていた。

上述の粘土板文書ならびに建築記念碑文を残した中期アッシリア時代の「マリの地」は、北メソポタミア（イラク北部、シリア北東部）を中心とする大國アッシリアの外縁にあって、それと密接な政治的・文化的関係を保ちつつ自治を享受した中規模の王国であった。しばしば世界最古の帝国と称される新アッシリア帝国（前 8-7 世紀）が、その帝国形成に先立ち顕著な領土拡張を果たした時代が中期アッシリア時代であり、この時代は新アッシリア帝国成立の先駆けとなる帝國的な政治思想と行政機構が醸成された時代と位置づけることができる。しかし、これまでに中期アッシリア時代の遺跡調査は世界的に見ても多くはなく、この時代についての情報は僅少で、新たな文字資料と考古資料が渴望されてきた。テル・タバンの出土文書は、こうした欠落を補うものとして海外からも大きな注目を集める新史料である。

また、日本隊により発掘された楔形文字文書史料が日本人の手によって本格的に研究された前例はなく、その意味でも、本研究は、

多くの分野でこれまで欧米諸国の後塵を拝して来た我が国のアッシリア学（＝楔形文字文書研究）の活性化にとって極めて意義深い事業と考えられた。

2. 研究の目的

（1）本研究の当初の目的は 2005 年に発見されダマスカス博物館に所蔵される前述の楔形文字粘土板文書を中心とするテル・タバンの出土文書を整理し、写真撮影ならびに筆写によって記録し、音訳、翻訳、および文献学的注釈をつけ、歴史的考察を加えることであつた。

（2）研究開始後、研究初年度である 2006 年度から毎年継続された国士舘大学発掘隊の発掘調査により、更なる楔形文字文書史料が次々と発見された。それら新たに発見された文書は、2005 年出土の中期アッシリア時代粘土板文書の研究と内容的に密接に関係し、新史料としての研究の緊急性も高いものであるため、こうした新たに出土する文書を研究対象に含め 2005 年以降に出土したすべてのテル・タバンの出土文書をシリア、ハッサケ市の発掘隊宿舎ならびにダマスカス博物館において記録、解読、研究を行うことを研究目的として、研究計画を随時修正した。これらのテル・タバンの出土文書（2005 年～2009 年に出土）は以下の 3 種類に大別される：（1）前 13 世紀半ばから前 12 世紀初頭までの中期アッシリア時代粘土板文書（約 250 点）；（2）前 14 世紀末から前 11 世紀初頭までの中期アッシリア時代建築記念碑文（約 200 点）（3）前 18 世紀後半から前 16 世紀までの古バビロニア時代粘土板文書（約 30 点）である。

3. 研究の方法

（1）山田（研究代表者）と柴田（研究協力者）が文献研究班を組織し、沼本（発掘責任者、研究分担者、連携研究者）と緊密に連絡を取りつつ、夏季の発掘期間（8 月、9 月）に毎年度シリアに渡航し、ダマスカス博物館ならびにハッサケ市の発掘調査キャンプにおいて出土文書史料の記録（遺物整理と番号付け、写真撮影、ハンドコピー作成）、解読、研究を行った。

（2）発掘調査以外の期間には、筑波大学を拠点に国内外の専門図書館を利用してテル・タバンの出土文書の研究を体系的に進めつつ、重要性、緊急性の高いものに関して優先的に研究を進め、国内外の学会やワークショップにおいて最新の研究成果を発表し、欧文ならびに和文で概報ならびに論文を出版した。

4. 研究成果

(1) 中期アッシリア時代粘土板文書：2005年に出土した文書（推定150～200点）に関しては、大半はダマスカス博物館でクリーニングが済んでおり、これらの史料の撮影、記録、ハンドコピー作製、ならびに基礎的研究はおおむね終了した。これによって前13世紀半ば～前12世紀初頭におけるテル・タバンの地方王宮に由来する文書庫に含まれた文書の種類と書式（物品管理記録、書簡、契約文書）、年代学的データ、カレンダー・システム等が解明された。これらについては、研究協力者の柴田が英文で概報を公刊した（2007年）ほか、複数の論文や口頭発表で研究を発表した。

研究の結果、当該の時代において、中期アッシリア王国の政治的影響下にありながら、独立した王国として自治を享受していたタベトゥ市において、中期アッシリアの文書とほぼ同様の書式で行政文書が書かれ、アッシリアの紀年職（*limu*）を用いた日付がつけられていることが明らかになる一方で、タベトゥ市では、アッシリアとは異なる月名からなるローカルなカレンダーが用いられていたという事実も明らかになった。

2006年に出土した27点ならびに2009年に出土した数十点（数不明）の中期アッシリア時代粘土板文書については、保存処理作業ならびにクリーニングが終了していないため、研究は今後の課題として残った。

(2) 中期アッシリア時代建築記念碑文：約200点が2005年以降2009年までに出土しており、これらについては、ハッサケの発掘調査キャンプにおいて、毎年、写真撮影、ハンドコピー作製、解読を行い、史料を記録してきた。これらの文書の研究によって、新たに明らかになった4名を加え、前14世紀末から前11世紀にかけてテル・タバンを本拠地に周囲を統治した少なくとも12名の領主の名とその血脈、ならびに建設事業の詳細が明らかになった。これに関しては、柴田と山田による概報（2009年）、ならびに山田と柴田の複数の論文と口頭発表で、主要な内容を発表した。

(3) 古バビロニア時代粘土板文書：2005年と2006年に出土した25点については、写真撮影、ハンドコピー作製、解読ならびに基礎研究を行い、これによって前18世紀半ば、バビロンのハンムラビ王の支配後、バビロンに代わってユーフラテス中流域の主要都市テルカの王権が、テル・タバンの周辺を含む地域を支配したことが証明された。これについては、山田が英文で概報を出版した（2008年）。

また、2007年に2点、2009年に1点の古バビロニア時代の粘土板文書が発見されたが、2007年発見の1点（神名表）は柴田が

公刊し（2010年）、もう1点（行政文書）は柴田と山田が概報（2009年）でその概略を示した。2009年の1点（養子縁組契約）は、山田が国際会議で発表した。これによって、古バビロニア時代タバトゥム市における学校教育、政治的・行政的状況、法文書の書式等が明らかになった。

(4) 今後の展望：これまでの研究によって、テル・タバンの出土文書は、その大半が体系的に整理、記録され、その概要が把握された。こうした概要に合わせ、重要性、緊急性の高いいくつかの文書や課題について研究を発表し、国内外の研究者の期待にこたえることができた。しかし、テル・タバンの出土文書の研究はなお途上にあり、当該文書の全容の解明には更なる系統的研究を要する。今後、これまでの成果を基礎に研究を継続し、当該文書すべての解読と研究成果をまとめた最終報告書をシリーズとして英文で出版することが具体的な目標となる。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計8件）

- ① Yamada S., “Administration and Society in the City of Tabatum as seen in the Old Babylonian Texts from Tell Taban,” *Al-Rafidan*, Special Issue (2010), pp. 247-252. (査読無)
- ② Shibata, D., “An Old Babylonian Manuscript of the Weidner God-List from Tell Taban/Tabatum in the Middle Habur Region,” *Iraq* 71 (2009), pp. 33-42. (査読有)
- ③ Yamada, S., “Preliminary Report on the Old Babylonian Texts from the Excavation of Tell Taban in the 2005 and 2006 Seasons: The Middle Euphrates and Habur Areas in the Post-Hammurabi Period,” *Al-Rafidan* 29 (2008), pp. 47-62. (査読有)
- ④ 山田重郎・柴田大輔「2007年シリア、テル・タバンの出土楔形文字文書」『平成19年度考古学が語る古代オリエント—第15回西アジア発掘調査報告会報告集』、西アジア考古学会、2008年、16-19頁。(査読無)
- ⑤ 柴田大輔、「タベトゥ市とマリの地の王：2005年テル・タバンの出土中期アッシリア文書」、『オリエント』第51巻第1号、2008年、69-86頁。(査読有)
- ⑥ Shibata, D., “Middle Assyrian Administrative and Legal Texts from the 2005 Excavation at Tell Taban: A Preliminary Report,” *Al-Rafidan* 28

- (2007), pp. 63-74. (査読有)
- ⑦ 山田重郎・柴田大輔、「2005/2006年シリア、テル・タバンの出土楔形文字文書」、『平成18年度考古学が語る古代オリエント—第14回西アジア発掘調査報告会報告集』、西アジア考古学会、2007年、128-131頁。(査読無)
- ⑧ 柴田大輔・山田重郎、「2005年テル・タバンの出土楔形文字文書について」、『平成17年度今よみがえる古代オリエント—第13回西アジア発掘報告会報告集』、西アジア考古学会、2006年、63-66頁。(査読無)

[学会発表] (計13件)

- ① Yamada, S., “Hana-type adoption contract from Tell Taban: New Evidence for the relations between Tabatum and Hana,” 2nd SAKURA meeting (2010.3.17, Fondation Hugot, Paris, France).
- ② Shibata, D., “Middle Assyrian dedicatory brick inscription to Adad-Ma’ani: New evidence for the royal line and religion of Tabetu,” 2nd SAKURA meeting (2010.3.17, Fondation Hugot, Paris, France).
- ③ Shibata, D., “Travel of a Middle Assyrian King to Carchemish via the Habur area,” 1st SAKURA meeting (2009.11.25, SOUGOU Research Building A107, University of Tsukuba).
- ④ Yamada, S., “Amorite Societies along the Lower Habur according to the Tell Taban Tablets,” Symposium: Formation of Tribal Communities (2009.11.23, Grand Hall, 7th Floor of Sunshine-City Bunka-Kaikan, Tokyo).
- ⑤ 山田重郎、「アムル人、アラム人とアッシリア」、特定領域研究「セム系部族社会の形成」、公開シンポジウム、国士舘大学鶴川キャンパス、2009年2月1日。
- ⑥ Shibata, D., “A Journey of King Shalmaneser I and Prince Tukulti-Ninurta in the Habur Region heading to the City of Carchemish,” the Workshop “Administration and Law in the Ancient Near East” (2008.10.11, Damascus, Syria).
- ⑦ Yamada, S.: “The City of Tabatum and Its Surroundings: The Organization of Power in the Post-Hammurabi Period,” 54. Rencontre Assyriologique Internationale (2008.7.23, Würzburg, Germany).
- ⑧ Shibata, D. “The City of Tabetu

- and the Kings of the Land of Mari. Documents for the Administration of a Middle Assyrian Local Princedom,” 54. Rencontre Assyriologique Internationale (2008.7.23, Würzburg, Germany).
- ⑨ Yamada, S., “Building Inscriptions from Tell Taban and Aramaeans,” 「セム系部族社会の形成」研究会、古代オリエント博物館、2008年4月26日。
- ⑩ Shibata, D., “Das Fürstentum Tabetu und ‘die Könige des Landes Mari’ in mittelassyrischer Zeit: Neue Textfunde aus Tell Taban,” (2008.4.17, Ruprecht-Karls-Universität zu Heidelberg, Germany).
- ⑪ 沼本宏俊、山田重郎 「テル・タバンの出土文書史料からみた部族」、 「セム系部族社会の形成」研究会、池袋サンシャインシティ・コンフェレンスルーム、2008年2月16日。
- ⑫ Shibata, D., “The City of Tabatu(m) and ‘the Kings of the Land of Mari’ in the Middle Assyrian Period,” (2007.11.27, University of Cambridge, United Kingdom).
- ⑬ Yamada, S., “The Old Babylonian Tablets from Tell Taban: The Middle Euphrates and Habur Areas in the Post-Hammurabi Period” (2007.10.25, University Museum of Pennsylvania, USA).

[図書] (計5件)

- ① 山田重郎、「前2千年紀におけるアムル人、アラム人とアッシリア」大沼克彦・西秋良宏編『紀元前3千年紀の西アジア—ユーフラテス川中流域に部族社会の原点を探る』、六一書房、2010年、129-138頁。
- ② 柴田大輔、「前二千年紀後半アッシリア統治下における地方拠点都市：景観、行政、祭祀」、西秋良宏・木内智康編、『農耕と都市の発生—西アジア考古学最前線』、同成社、2009年、213-226頁。
- ③ Shibata, D. - Yamada, S. “The Cuneiform Texts from the 2007 Excavations at Tell Taban: A Preliminary Report,” H. Numoto (ed.), *Excavations at Tell Taban, Hassake, Syria: Preliminary Report on the 2007 Season of Excavation and the Study of Cuneiform Texts*, Tokyo, 2009, pp. 87-109.
- ④ 山田重郎、「タバトゥム市とその周辺：ポスト・ハンムラビ時代のハブル川下流

域とユーフラテス川中流域における政治的・社会的・文化的諸相」、前川和也編、『シリア・メソポタミア世界の文化接触：民族・文化・言語』（特定領域研究『セム系部族社会の形成』平成20年度研究会報告集）、2009年、86-95頁。

- ⑤ 柴田大輔、「中期アッシリア時代における紀年職研究の現状とテル・タバン出土中期アッシリア行政文書の年代」『西アジア考古学の編年—日本の考古学調査団からのアプローチ』日本西アジア考古学会、2007年、30-33頁。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山田 重郎 (YAMADA SHIGEO)
筑波大学・大学院人文社会科学研究所・教授
研究者番号：30323223

(2) 研究分担者

沼本 宏俊 (NUMOTO HIROTOSHI)
国士舘大学・体育学部・教授
研究者番号：40198560
(H20→H21: 連携研究者)

(3) 研究協力者

柴田 大輔 (SHIBATA DAISUKE)
筑波大学・大学院人文社会科学研究所・助教
研究者番号：40553293